

## 友との別れ

平成八年度 五年男児

「残念だけど、朋也君が秋田へ転校してしまっただ。」

十月の初め、先生が悲しそうに言いました。そのとたん、ぼくは、目の前が真っ暗になってしまいました。そして以前、朋也君がこう言ったのを思い出したのです。

「おれ、転校するがもしんね。」

あの言葉は本当だったのです。さびしいと思うと同時に次のしゅん間、なおさら「次の新人戦は負けられない。」

と思いました。朋也君が転校してしまうというところで、新人戦が、一緒にプレーできる最後の大会になるのです。負ければ、その時点で朋也君と野球をするのは終わりです。「負けたくない。」という思いがわき上がりました。

一回戦がある日、緊張が全然おさまりませんでした。しかも、チームのみんなやかんとくからキャプテンに指名され、ものすごく体がブルブル震えてしまいました。

いよいよ試合開始です。先発ピッチャーは朋也君でした。朋也君の球はとても速く、相手のバッターはかすりもしません。味方打線は絶好調で、三回まで大量リードをうばいました。このままいけば楽勝でした。ところが、次の回、かんとくが、ぼくをピッチャーに指名しました。

ぼくは少し不安な気持ちになりました。なぜならぼくはコントロールに自信がなかったのです。心配していたことが起きてしまいました。ほとんどストライクが入らないのです。あせればあせるほど入りません。フォアボールだけでどんどん点を入れられ、追い上げられてきました。マウンドにいますとすごい孤独感を感じました。

もう一点もやれないということまできた時に朋也君が、大きな声ではげましてくれました。ぼくは、朋也君のためにも「負けられない。」と思い、一つ深呼吸をして、バッターに立ち向かいました。二者連続三振。ぼくは、「フーッ。」と息をはき出しました。この試合に勝ち、まだ朋也君と一緒にできる喜びに満ちあふれていました。

二回戦は、順調に勝ち、いよいよ三回戦の相手は亀城でした。強いチームと聞いていたので気持ちを引きしめてのぞみました。うわさ通り、とても強く、朋也君から五回まで六点もうばい取り、しかも、相手のピッチャーは、球のスピードはないのですが、とてつもなくコントロールが良く、守備もまとまっています、このままでは勝ち目がないなと思いました。しかし、六回の攻げきで味方打線が大ばく発し、ついに同点に追いつきました。最終回、若浜は得点がなく、亀城の攻げきです。ぼくたちとしては、ここをふんばって延長戦に勝負をかけるしかありません。一点でも取られたらもうそこで終わってしまうのです。朋也君の投げる球は、今までよりますますスピードが速くなりました。しかし、力が入りすぎたのか、先頭バッターにフォアボールを与えてしまいました。一死三塁となり、大ピンチをおかえてしまいました。ぼくは、

「朋也君がんばれ。」と、何度もはげましました。亀城のバッターが打ったボールはピッチャーゴロになりましたが、その間にランナーがホームに帰り、七対六、ぼく

たちは負けてしまいました。負けたことでくやしいのと、それ以上に、これが朋也君との最後の試合になってしまったという思いで、ぼくは、野球を始めてから、初めてなみだをこぼしました。

ぼくには夢があります。来年、朋也君のいる小学校の野球部と全国大会で戦ってみたいということです。そのために、ぼくは、これからも一生けん命練習にはげんでいきたいです。